

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

3

2026
No.726



特集

花見でなごみ

花は不思議な力を持っている 假屋崎省吾

連載

ソーシャルワークってなんだろう？

木全和巳

心に種をまく 安田菜津紀

- 1 人として 本田典子
- 2 【インタビュー】いま語りたい 心の窓を広げて eri
- 4 教員のはじめの一步 桜井佳子
- 6 心に種をまく 安田菜津紀
- 7 あなたに届けたいこの一冊 宇野和美
- 8 この子と歩む 坂本真里子
- 11 進め！ 推し活道 中村くに子

みんなの ねがい

2026年3月号

No.726

特集 花見でなごみ

- 12 わたしの花自慢
- 14 花は不思議な力を持っている 假屋崎省吾
- 17 障害のある方と花との出会い 一般社団法人アプローズ
- 20 一緒にお花見しませんか
- 22 お花見スポット
- 24 私ときょうだい 宮地宏和
- 26 子どものミカタ 松島明日香
- 28 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
- 32 シリーズ 18歳 國本真吾
- 34 暮らしの場は今 田村和宏
- 36 実践にいかす障害と医療 全 有耳
- 38 ニュースナビ 学校統廃合問題 山本由美
- 40 実践の魅力 田中幸樹
- 43 全障研の支部ニュース、紹介します 瀧澤颯大
- 44 みんなのひろば
- 46 息子と歩く 千葉桜 洋
- 47 BOOK／編集後記
- 48 全障研支部連絡先一覧



デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙のこぼ

学校の帰り道、仲良し三人組が線路脇に座りしゃべっていた。この場所は彼らお気に入りの溜まり場なのだろう、楽しそうだ。それぞれのキャラが滲み出て愛おしい。

僕も小学校のとき、いつも仲良し三人で登下校していた。石蹴りしたり、探検ごっこしたり。何かすごく特別な時間だった気がする。あの二人はどうしてるんだろう。写真を見ながら想いを馳せる。

こないだ地元の大阪で展示があった。数十年ぶりに会う友人たちもたくさん来てくれた。最初はびっくりだけど、すぐお互い呼び捨てで顔を見合って。あっという間に昔の感じに戻る。同級生っていいなあ、遠い昔をいっしょに過ごしたっていう最強の事実。まるで、一瞬であの頃に戻してくれる魔法にかかったような時間だった。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。



冬から春へ
ふきのとう
(畑中)



梅 (あい)



丹精込めて育てた我が家の薔薇、
コーヒー飲みながら眺めるのが最高！
(みかりん)

特集

花見でなごみ

2025年度も大詰め、今年度もみなさんお疲れさまでした。と〜っても忙しい中、また新年度がやってきます。そんな日々ですが、ちょっとひとやすみしませんか。

そう、今回の特集では、みなさんと「花見でなごみ」たいと思います。

「花を見る余裕なんてない…」という声が聞こえてきそうですが、だからこそリフレッシュが必要なのでは。立ち止まってお花を愛でると、きっと心も柔らかくなるはず。

さあ、一緒にお花の魅力を味わいましょう！

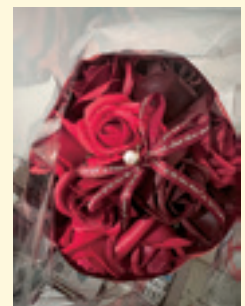
むずかしいことは考えず、ほっこりと…



支援学級の子どもたち作 (なおび)



なかまの手しごとペーパーフラワー。
アレンジがすてき。(ポピーの家)



(いなっぺー)

京都



京都御苑の枝垂れ！夕暮れ時が幻想的
です。(みかちゃん)

石川



能登の桜。JDF（日本障害フォーラム）の支援活
動で能登に行ったときに撮りました。(S.N)

お花見スポット

全国の読者よりお花見
スポットを教えてもら
いました

東京



同郷の友と見上げる東京タワーと桜。
(たてかわ)

埼玉



立正大学熊谷キャンパスの、人知れず満開！（こじまん）



最終回

青年・成人期の自分づくり

この連載では、さまざまな実践者がそれぞれの実践を通して、子どもの発達や魅力について語ります。



滋賀大学 松島明日香

◆ストライキ宣言

コウジさんは33歳。作業所で働き始めて10年が経ちます。とても穏やかな方で、植物が大好きで、いつもやさしく話しかけながら水をあげるのが日課でした。そんなコウジさんが、長年こつこつととりくんできた手織りの仕事を突然「嫌です」と拒否するようになりました。あんなに静かに穏やかに毎日を過ごしていたコウジさんの突然のストライキ宣言に職員たちは驚きました。

◆なんでも班への憧れ

この時期の発達診断で最も特徴的だったのが【働く自分】の絵を描いてもらった場面でした。「働いている一番格好いいコウジさんを描いてください」とお願いすると、右手にハンマー、左手にドライバーをもった自分を描きました。さらに、自分の左側にはタンス、右側には解体したタンスの引き出しと外したネジを描き加えます。手織りの仕事ではこんなことはしません。実は、コウジさんは少し前からなんでも班という別の作業班に時々『お助け隊』として参加していたのです。一日の大半を過ごしている手織り

班ではなく、時々、『お助け隊』として加わるなんでも班で働く自分を描かれたことで、コウジさんが実はなんでも班で働いている自分が一番格好いいと感じているということがわかってきました。

なんでも班は外から仕事を依頼されることが多く、仲間たちはお揃いのクールな作業着を装い、みんなで協力して工具を使って家具の修理をしたり、重い物を運んだり、お祭りの時などはテントの組み立てをかけ声を発しながらおこなったりと、傍から見ても彼らの姿は格好よく、コウジさんが憧れるのも理解できました。実はなんでも班に憧れる仲間はコウジさんだけではなく、「なんでもはんにしてください」と書いた手紙を職員に渡してくる仲間もいることを後で知りました。

◆輝く自分を実感できる実践

コウジさんは2次元可逆操作期（4歳頃の発達の節）にいました。この発達段階にいた人たちは、集団の中の自分の存在や位置に敏感になり、そこに自分の値打ちを見出そうと「格好よくありたい」「必要とされたい」と願うようになります。中には、コウジさんのようにこれまで黙々とこなしていた仕事への意欲

ソーシャルワークって なんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

最終回

それでも一人のソーシャルワーカー でありつづけたい



日本福祉大学

木全和巳

きまた かすみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』（クリエツかもがわ）など

改めてソーシャルワーク実践の価値と意味を問い直す

まだまだ伝えたいことがたくさんありますが、とうとう最終回となりました。全体を通してのテーマは「ソーシャルワークってなんだろう？」でした。そしてサブタイトルは「一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、かけがえのない生命を共に輝かせるために」としました。取り上げた一つひとつのテーマについても、奥が深く、限られた分量の中で、大切に考えたいことの「本質」を具体的にわかりやすく表現できたとはいっても言い難いです。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」と繰り返していた井上ひさしさんのようにとはとてもいきませんでした。

福祉労働者の視点も大切にしたい

日本社会の中でケアワークも含めながらソーシャルワークについて語り合っていると、どうしても「ふくし」という言葉の印象に引きずられて、「自己犠牲の精神」という賞賛のまなざしに巻き込まれてしまっています。当事者たちへの「憐れみ」のまなざしと裏表の関係にあるのでしょうか。私自身、児童養護施設や旧知的障害児施設で働いていた時に、「えらいね」という何とも言えない言葉を投げかけられ、返答に困ったことがあります。学生たちも、「何にもえらくないのに」「したくてやっているのに」という言葉で応答してくれているの

が救いですが。

歴史的にみれば、ソーシャルワークという実践と労働組合運動は切り離せません。戦前からのセツルメントの活動があげられます。セツルメントは資本主義が生み出す貧困に対して、宗教家や学生が都市の貧困地区に自ら居住して宿泊所、託児所、教育、医療活動などの社会事業を行う活動です。19世紀にイギリスで始まっています。日本でも1923年の関東大震災の復興を機に、東京帝大（現・東京大）の学生や教員たちが下町を中心に活動拠点をつくり、実践を始めます。

ここでは労働学校もつくれ、女工さんたちのストライキも応援しています。現在の保育所につながる託児所もつくりていきます。医療生協や生活生協も同様です。このようにソーシャルワークと労組組合の活動は、深く結びついています。

私自身は、名古屋市職員になった時も、日本福祉大学で働き始めてから今でも、当たり前のこととして労働組合の一員です。いまはもう死語ですが、児童養護施設の職員時代には子どもたちにも声をかけて30分の「時限スト」をしたことは、ほんとうに懐かしい思い出です。労働組合の運動や活動に理解をしめさず、参加しないソーシャルワークの研究者や実践家については疑問に思うこともあります。

「自己犠牲」ではなく「自己活生」を

ヤングケアラーについて、ゼミで映像を観ながら、語り合っていた時です。ある学生さんから「『自己犠牲』っておかしいよね」という発言がありました。そこで、私が私なりに

まとめなおしてみたのが次の言葉です。「誰かのために生きることが自分のために」という「自己犠牲」、「自分のために生きることが誰かのために」という「自己活生」です。「自己活生」というのは私の造語です。はじめは「自分を活かす」としましたが、「自己犠牲」という言葉の対語を四字熟語であれこれ考えていて創作してみました。辞書を紐解きながら「あれっ」と思ったのは、「自己犠牲」の反対語です。これは「自分本位」「自己本位」となっています。「自己中心」いわゆる「自己チュー」という言葉で流布している言葉です。否定的な意味に使われています。一方で「自己犠牲」というのは、「特攻精神」や「母性神話」が強調される「日本世間」が好きな言葉です。「今だけ金だけ自分だけ」の「新自由主義者」たちが、自分は「自己チュー」なくせして、庶民には押しつけてくる規範でもあります。

「個人主義」も悪しき意味で使用されています。本来は、憲法13条にある「個人の尊重」のはずですが、「個人主義」を悪ものにしてしまうのも、「世間」の「まなざし」を強く意識させられる「日本的集団主義」の「心性^{しんせい}」ですね。この「心性」は、容易に「自己責任」や「自助」と結びついてしまいます。さらに「強化」されれば、「おクニのために」となります。韓国朝鮮中国といった隣国ヘイトや外国人ヘイトは、排外主義と結びつき、異論を排除しつつとも簡単に「全体主義国家」になっていきます。そして、そこからは「戦争」への道が待っています。けれども、格差や貧困がともどもなく進み、壊れている現状では、構造的につくられた



最終回

【まとめにかえて②】

「18歳」を輝く未来の扉を開ける時期に



鳥取短期大学

國本真吾

教育の権利保障を実現する場としての専攻科づくり

「18歳」は、ライフステージでいうと「青年期」に位置します。この時期は、「子どもからおとなへ」「学校から社会へ」といった二重の移行をむかえますが、障害の有無によりその先の進路の描き方は異なっているのが現状です。このシリーズにおいても、高等部段階、卒業後の学びの場としての専攻科や生涯学習といった内容が紹介されました。一方で、声が高まっている「18歳の壁」問題への言及もありました。

「18歳の壁」に対して、専攻科づくりに代表される教育年限の延長を訴えてきた私の立場からすると、どこか複雑な思いがあります。専攻科づくり運動においては、障害のある子どもの教育権保障の「第三の学びの扉」を開こうと訴えてきました。障害のある子ども・青年にとって、学校教育卒業後の豊か

な生活を望むうえでは、「18歳の壁」問題とは共通する課題意識があります。

しかし、私たちが願ってきた専攻科づくりは単なる「居場所」づくりではなく、子ども・青年の豊かな発達を求める教育の権利保障を実現する場として求めています。

18歳以降も希望する人が学び続けることが、機会として保障される一つのあり方が「専攻科」であり、それが挾一的にならない形で、大学をはじめとした高等教育、そして社会教育や生涯学習といった形も含めて、教育年限延長要求の声をあたり前に受けとめることができる社会のあり方を問うてきました。その際、学びの主人公が子ども・青年であることから、彼らを主語にした形で実践を深めて運動を展開する形だったと振り返ることができます。

「預かってくれる」場の背景

「18歳の壁」の議論において、



ニュースナビ

2026年3月号

News Navi

学校統廃合と小中一貫教育、 障害児教育への影響

学校統廃合の現状

2000年頃から全国の公立小・中・高校の廃校数が急増し、この25年間、毎年平均約450校が廃校になる状況が続いている（図参照）。

特に、2014年にスタートした「地方創生」政策において、総務省が全自治体に策定を要請した「公共施設等総合管理計画」が、今、全国の自治体で統廃合を後押ししている。これは将来的な人口減、税収減に対応して、公共施設の改修を行う際に財源が不足することを見越して、施設の総量を予め減らすことを計画させるものである。交付税不交付団体の場合、この計画に施設の集約化（統廃合）、他の公共施設との複合化などを盛り込んでおけば、有利な地方債の対象になるといった多くの財政誘導が準備されている。

公立学校は1970～80年代に建設された校舎が多く、老朽化のため一気に改修工事が求められることから、自治体が国の交付金や期限付きの地方債などを活用しようとするのも無理はないのかもしれないが、子どもにとってどうなのか、という視点を忘れてはならない。

進む「学園構想」

今、多くの自治体で「学園構想」と称し、中学校区ですべての小・中学校を統合し、時には

公民館施設や図書館なども「複合施設」化して、「学園」とする計画が進められている。ここでは小中一貫教育が行われ、2015年に学校教育法が改正されて新しい学校種とされた9年一貫の「義務教育学校」が活用されるケースも多い。東京では三鷹市など、長野県や大阪府などの多くの自治体で進められている。新しい制度名を散りばめ、これまでと違う、たとえば「協働的・対話的な学び」「新たな学び」が行われると保護者に「宣伝」し、計画化を急ぐのが特徴的だ。実際に統廃合でどんなリスクがあるのか、事前に説明されることはない。小中一貫教育や「義務教育学校」の有効性やデメリットも十分に検証されているわけではない。

障がいを持つ子どもたちへの影響

そして学校がなくなる小学校区は、住民にとっての生活圏であり、学校を中心に地域コミュニティがつくられ、住民自治の基礎単位であることが多い。障がいを持った子どもたちにとって、慣れ親しんだ小学校が統合されることの影響は計り知れない。

学校統廃合の増加を最初に押し上げたのは、多くの区市が学校選択制を導入した東京都だった。2003～05年頃、統合対象となった都内の小規模校を訪問する中で、児童数100人前後で特別支援級と普通級の子どもの関係がす

2026 Highlights

障害者の権利を守り、発達を保障するために

本体 650 円＋税

個人定期購読

年間 9,400 円(税・送料含)

みんなのねがい

——2026 年度 注目の新連載——



「私の人生」—障害者家族の「意見表明権」を考える—

田中智子(佛教大学)

当たり前のことですが、障害のある人、そして家族にも「私の人生」があります。でも、さまざまな状況のなかで、「私の人生が大事!」ということ声を大にして言えない状況にある人もいます。

障害者施策や社会資源のあり方を考える際に、障害のある人や家族は、どのような現実を生きているのか、どのようなねがいを持っているのかを出発点にすることが大事です。連載を通じて、家族の「意見表明権」の意義についてみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

障害児教育に想像と創造を

児嶋芳郎(立正大学)

子どもの行動の意味がわからない、どうやって実践をつくってあげたいのか…と悩んでいませんか?

子どもたちの見せる姿には、必ず今を懸命に生きている意味が背景にはあります。その意味を子どもをまるごととらえる営みを通して想像し、それを土台に目の前の子どもたちとともに新たな実践を創造していく。連載のキーワードは“想像と創造”。読者のみなさんが新たな実践を創造する際の一助になればと思います。



リレー連載 発達の魅力

長崎純子(発達相談員)、高橋真保子(発達相談員)、木下孝司(神戸大学)

子どもたちの多彩な行動の意味を「発達」という視点から読み取ります。

3人の執筆者による基礎から学ぶリレー連載。

全障研出版部

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 4-7 新宿山吹町ビル 5F
TEL 03-6265-0193 FAX 03-6265-0194 www.nginet.or.jp

